

女川町議会 福島を視察^⑯
デブリどう取り出すか 予定が立っていない

女川町議会は2014年7月、福島県の東京電力福島第一原発事故の被災地を視察した。その時に応対した2人を今春、私は再訪した。1人目、福島県の大熊町議会事務局長・池沢洋一氏(59)の話を前回に続いて記す。

原発は大熊町北端から隣接の双葉町にまたがって立つ。11年3月11日夜。池沢氏は、原発の緊急炉心冷却装置が正常に動いたという話を聞く一方で「どうも危ないらしい」という噂も耳にしたが、確認のしようもなく、体育館へ避難してくる町民への対応に追われた。

12日午前6時頃。「念のため避難して下さい」という政府の指示を聞き、原発の異変を察知。茨城県から来たバス数十台と自衛隊トラック数十台も使い、午後2時頃までに町民の大半を送り出す。

池沢氏を含む町職員約10人が町に残った。飲料水確保のため、町役場で給水塔の水を自衛隊の給水車へ抜き出す作業をしていた時だ。「バーン」と大きな音。大地を揺るがすほどの音ではないが、空気の振動が体に伝わってきた。

午後3時36分。1号機の爆発だった。

(これ発電所だよね)と思いつつも、(どこかの工場の可能性もあるよね)と半信半疑。だが、(これをかぶると、まずい)とホースを放り投げ、自衛隊員らに「みんなもなんぼ自衛隊だと言っても、汚染されたら大変だから、逃げたほうがいいですよ」と呼びかけて車に乗った。約8キロ離れた丘で原発の方角を振り返った。

薄灰色の煙が、噴煙のようにうろこを描きながら雲一つない青空へ伸びて行った。一目散に逃げた。手にした私物は、タバコと携帯電話と運転免許証だけ。放射能汚染は念頭にあっても、すぐに帰れる気持ちでいた。「安全神話に頭が冒されていたのかな」と話す。

町から約60キロ離れた三春町の体育馆でテレビを見た。14日に3号機でも爆発。15日に4号機でも爆発が起きたのを見て、「これ、ひょっとしたら帰れないんじゃないねえ……」と口にした。

周囲から「ああ……」とうめき声が漏れ、泣き始める人もいた。

2カ月後の5月。津波の犠牲者を捜索する自衛隊に1時間ほど立ち合った。携行した線量計のアラームは「ピピピ」と

鳴り続け、数値がみるみる上がる。居ても立てもいられない思いだ。放射能汚染を初めて実感した。その時の被曝線量は56マイクロシーベルト——。私が今春、町から約100キロ離れた会津若松市に池沢氏を訪ねた時の空間放射線量は毎時0・07マイクロシーベルトだった。

15年8月、町は全町民にアンケートをした。将来的な希望も含め町へ戻りたいと考えている人は11・4%。回収率は50・0%だった。アンケートを返さなかつたのは戻らないからだと考えれば、戻りたい人は全町民の5・7%になるか。

池沢氏は帰るつもりだ。家族は帰らないと言ふけれど。

今、町南端で市街地整備が進む。そこに、町民約1千人と、研究者や原発の廃炉作業従事者ら約2千人の計約3千人が移り住むことを町は見込む。

原発の廃炉作業はいつ終わるのか。まだ明確には見通せない。原子炉で溶け落ちた燃料デブリが立ちはだかっている。

池沢氏は言う。「デブリそのものを誰も見ていないんです。どう取り出すか、予定が立っていない。取り出せるのか。それも、これから話ですよね」

そもそも原発は、こんな仕組みで電気を生みだしている。原子炉でウラン燃料に中性子をぶつけ核分裂を起こす。その時に発生する高温の熱で水を沸かす。その蒸気でタービンを回して、電気を得る。

燃料は、使用前なら、少しくらい近づいてもさほどの害毒はない。だが、使用中は違う。核分裂が進むにつれ、放射線を出す物質の量も種類も増える。使用済みの燃料になれば、強烈な放射線を出す物質のかたまりになり、近寄れば死に至る。放射線の強さが使用前のレベルに下がるには、10万年はかかるとされる。

池沢氏は語る。「現在の原子力政策は、あとの処分のことは考えていない」。原子力政策に限った話ではない。震災直後は日本各地で節電に努めた。が、「あつといいう間にまた元に戻り、市街地は一晩中、明かりをつけているよね」。

「人が生きるのに廃棄物を出す。それがまた戻ってきて役立つ、その繰り返しで人の生活が、地上そのものが成り立つ。それを超えるものがあつてはならないんだろうと思うんです」

子さんが迎えに行き、小学生の時は、夏休み中、幸手司さんとかつ子さんが預かった。孝さんの妹夫婦も雄勝町に暮らしており、町のうわさは妹夫婦の耳に入る。かつ子さんが弘江さんを悪く言つたという話は一切なかつた。

結婚後も弘江さんはいつも素顔。夜寝る前に化粧水をつける

鳴り続け、数値がみるみる上がる。居ても立てもいられない思いだ。放射能汚染を初めて実感した。その時の被曝線量は56マイクロシーベルト——。私が今春、町から約100キロ離れた会津若松市に池沢氏を訪ねた時の空間放射線量は毎時0・07マイクロシーベルトだった。

15年8月、町は全町民にアンケートをした。将来的な希望も含め町へ戻りたいと考えている人は11・4%。回収率は50・0%だった。アンケートを返さなかつたのは戻らないからだと考えれば、戻りたい人は全町民の5・7%になるか。

池沢氏は帰るつもりだ。家族は帰らないと言ふけれど。

今、町南端で市街地整備が進む。そこに、町民約1千人と、研究者や原発の廃炉作業従事者ら約2千人の計約3千人が移り住むことを町は見込む。

原発の廃炉作業はいつ終わるのか。まだ明確には見通せない。原子炉で溶け落ちた燃料デブリが立ちはだかっている。

池沢氏は言う。「デブリそのものを誰も見ていないんです。どう取り出すか、予定が立っていない。取り出せるのか。それも、これから話ですよね」

そもそも原発は、こんな仕組みで電気を生みだしている。原子炉でウラン燃料に中性子をぶつけ核分裂を起こす。その時に発生する高温の熱で水を沸かす。その蒸気でタービンを回して、電気を得る。

燃料は、使用前なら、少しくらい近づいてもさほどの害毒はない。だが、使用中は違う。核分裂が進むにつれ、放射線を出す物質の量も種類も増える。使用済みの燃料になれば、強烈な放射線を出す物質のかたまりになり、近寄れば死に至る。放射線の強さが使用前のレベルに下がるには、10万年はかかるとされる。

池沢氏は語る。「現在の原子力政策は、あとの処分のことは考えていない」。原子力政策に限った話ではない。震災直後は日本各地で節電に努めた。が、「あつといいう間にまた元に戻り、市街地は一晩中、明かりをつけているよね」。

「人が生きるのに廃棄物を出す。それがまた戻ってきて役立つ、その繰り返しで人の生活が、地上そのものが成り立つ。それを超えるものがあつてはならないんだろうと思うんです」

小柄な妻は、両足を宙に浮かせ、満面の笑み。隣に長身の夫がゆったり座る。ベンチに腰掛けた2人。『小さな恋のものがたり』(みりー)のような2人がいる。

雄勝町役場勤務の佐々木勇人さんと町立雄勝病院栄養士の加藤弘江さんは仕事の接点がなく、町職員の親睦会で初めて出会う。一緒に卓球をした。

妻は中学校で卓球部。その腕前は「うまくはなかつたです」ねえ」と夫は笑う。

夫は石巻工業高校を卒業後、就職。スポーツ好きだ。職場で野球チームを組んでいた。

だが、彼は身体障害者1級の腎臓病だった。中学時代に闘病が始まり、22歳の時、仙台社会保険病院で移植手術を受けた。米国の若者からの提供だ。空輸費7千ドルは、両親に負わせず、自分でローンを組んで返済した。結婚前に約5年、付き合つた。

新婚の頃の写真がある。ベンチに腰掛けた2人。『小さな恋のものがたり』(みりー)のような2人がいる。

雄勝町役場勤務の佐々木勇人さんと町立雄勝病院栄養士の加藤弘江さんは仕事の接点がなく、町職員の親睦会で初めて出会う。一緒に卓球をした。

妻は中学校で卓球部。その腕前は「うまくはなかつたです」ねえ」と夫は笑う。

夫は石巻工業高校を卒業後、就職。スポーツ好きだ。職場で野球チームを組んでいた。

だが、彼は身体障害者1級の腎臓病だった。中学時代に闘病が始まり、22歳の時、仙台社会保険病院で移植手術を受けた。米国の若者からの提供だ。空輸費7千ドルは、両親に負わせず、自分でローンを組んで返済した。結婚前に約5年、付き合つた。

満面の笑み「わたしの、あげる」

新婚の頃の写真がある。

ベンチに腰掛けた2人。

小柄な妻は、両足を宙に浮かせ、満面の笑み。隣に長身の夫がゆったり座る。

かせ、満面の笑み。隣に長身の夫がゆったり座る。

ベンチに腰掛けた2人。

小